

別添資料 1

外部評価委員会実施報告

1. 平成 25 年度外部評価委員会実施目的

本学のグローバル人材育成推進事業(平成 24 年後期～平成 28 年度)の PDCA サイクルを実践する為、事業開始後の一年半に実施した事業成果の達成状況を評価し、改善を図る為に、外部有識者 5 名による外部評価を受ける。

2. 外部評価委員一覧

氏名 (敬称略)	担当(評価の視点)	所属	役職	他肩書
上杉 道世	事務体制	慶應義塾大学	信濃町キャンパス事務長	大学マネジメント 研究会副会長
川島 啓二	高等教育政策	文部科学省 国立教 育政策研究所 高 等教育研究部	部長	高等 教育 開 発 協 会 会長
穂屋下 茂	教育工学	佐賀大学 全学教育 機構(文化・芸術部 門長)	教授	日本リメディアル 教育学会前会長
堀江 学	英語・国際交流	一般財団法人 国際 教育交流フォーラム	理事長	JAFSA 理事
松本 美奈	大学の情報公開	読売新聞東京本社	編集委員	「大学の實力」編集者

3. プログラム

【第 1 部】発表パート ※役職は外部評価委員会実施当時		
14:00	(5 分)	開会挨拶(藤岡一郎 学長)
14:05	(5 分)	本事業の全体像(大城光正 副学長)
14:10	(20 分)	グローバル・サイエンス・コース/イングリッシュ・キャリア・コース 整備プロジェクトチームによる H24-25 年度の事業内容の発表(大和隆 介 外国語学部長)
14:30	(55 分)	各プロジェクトチームによる H24-25 年度の事業内容の発表 ① ラーニングcommons/グローバル・ビレッジ プロジェクトチーム (井上正樹 図書館事務部長) ② 教学プロジェクトチーム (若松正志 教学センター長) ③ 事務プロジェクトチーム (渡邊純一 総務部長)

		④ 入学プロジェクトチーム (耳野健二 学長特命補佐) ⑤ 調査・研究プロジェクトチーム (佐藤賢一 教育支援研究開発センター副センター長)
15:25	(5分)	休憩
【第2部】対話パート		
15:30	(60分)	外部評価委員の講評(各委員6分程度)、次回開催(平成27年3月(予定)) 外部評価委員会に向けての課題整理 「事業報告書」に対する各委員からの講評(五十音順)、佐藤 調査・研究プロジェクトチームリーダーのコーディネーションにより、外部評価委員から頂いた講評内容および平成26年度以降の本事業における課題の整理 1)上杉 道世 (慶應義塾大学 信濃町キャンパス事務長、大学マネジメント研究会副会長) 評価の視点:事務体制担当 2)川島 啓二 (文部科学省 国立教育政策研究所 高等教育研究部部长、高等教協会会長) 評価の視点:高等教育政策担当 3)穂屋下 茂 (佐賀大学 全学教育機構(文化・芸術部門長)教授、日本リメディアル教育学会前会長) 評価の視点:教育工学担当 4)堀江 学 (一般財団法人 国際教育交流フォーラム理事長、JAFSA 理事) 評価の視点:英語・国際交流担当 5)松本 美奈 (読売新聞東京本社 編集委員、「大学の實力」編集者) 評価の視点:大学の情報公開担当
16:30	(30分)	雄飛館ラーニングコモンズ見学 平成25年10月に仮オープンした雄飛館2-3階・ラーニングコモンズの見学

4. 第一部:発表パート(14:05-15:35)

発表は平成24-25年度京都産業大学グローバル人材育成推進事業実施報告書の各プロジェクトチーム該当部分に沿って、各プロジェクトチームリーダーより行われた。

5. 第二部:対話パート(15:40-16:50)

5-1. 出席者について

【外部評価委員】

上杉 道世委員（慶應義塾大学 信濃町キャンパス事務長、大学マネジメント研究会副会長）

評価の視点:事務体制担当

川島 啓二委員（文部科学省 国立教育政策研究所 高等教育研究部部長、日本高等教育
開発協会会長） 評価の視点:高等教育政策担当

穂屋下 茂委員（佐賀大学 全学教育機構(文化・芸術部門長)教授、日本リメディアル教育
学会前会長） 評価の視点:教育工学担当

堀江 学委員（一般財団法人 国際教育交流フォーラム理事長、JAFSA 理事）

評価の視点:英語・国際交流担当

松本 美奈委員（読売新聞東京本社 編集委員、「大学の實力」編集者）

評価の視点:大学の情報公開担当

【学内出席者】

大城 光正プロジェクトリーダー（副学長）

大和 隆介(外国語学部長)

平石 裕実(コンピュータ理工学部長)

黒坂 光(総合生命科学部長)

若松 正志(教学センター長)

耳野 健二(学長特命補佐)

佐藤 賢一(教育支援研究開発センター副センター長・自己点検・評価委員会委員長)

中村 暢宏(総合生命科学部教授)

渡邊 純一(総務部長)

吉門 敬二(教学センター事務部長)

矢野 博(入学センター事務部長)

井上 正樹(図書館事務部長)

杉森 紀之(総務部人事担当課長)

林 秀美(外国語学部長補佐)

物部 康雄(理学部長補佐)

森 洋(学長室教育支援研究開発担当課長)

事務局:

山内 尚子(学長室教育支援研究開発担当)

中沢 正江(学長室グローバル人材担当)

尾崎 良子(学長室グローバル人材担当)

水野 直子(学長室グローバル人材担当)

足立 薫 (学長室グローバル人材担当)

松井きょう子(学長室教育支援研究開発担当)

以上 22 名

【欠席者】

村瀬 篤(理学部長)、鈴木 清巳(国際交流センター長)、小林 慎一(学長室長)、林 誠次
(共通教育推進機構事務部長)、忠田 護(コンピュータ理工学部長補佐)、椎 清二(総合生命
科学部長補佐) 以上 6 名

5-2. 対話内容

【コーディネータ:佐藤賢一 教育支援研究開発センター副センター長 (調査・研究プロジェクトチームリーダー)】

第二部の対話パートでは、外部評価委員会の皆様方から、本事業の実施報告書の内容、第一部のプレゼンテーションの内容をうけて、何かお気づきになった点、或いは疑問に思われている点、それぞれお時間をとっていただいてそういった点につきまして、まずご発信いただきたいと考えています。そのうえで、本事業の PT(プロジェクトチーム)メンバーのなかで、質問内容に対して、答える内容につきまして、挙手の上、その旨意思表示していただいて、ご対応いただけますよう、お願い致します。

会場にあります二つのホワイトボードに、第二部の対話パートでの委員各位のご発言内容につきまして、要点整理をしつつ、随時書込みさせていただきたいと思えます。ご発言内容と少々異なる点等、気になられる場合もあろうかと思えますが、その点につきましては、指摘いただければ、その都度訂正致しますので、ご了解いただきたいと思えます。

最後に、外部評価の先生方の皆様には、あらかじめきちんとお伝えしてはいけなかったかとは思いますが、ご講評を頂くにあたりましては、プログラムに書かれてあります五十音順でお願いできればと考えております。各委員の皆様には、6 分程度と書かせて頂いていますが、特段これに縛られることなく、どうか忌憚のない話をお願いしたいと思います。

前置きが長くなりましたが、まず初めに上杉様のほうからよろしくお願ひしたいと思います。よろしくお願ひします。

【上杉委員】

事前にコメントを文書にて差し上げていますので、その内容についてご確認頂きたいと思えます(別添資料1(本資料)末尾参照)。6 分では言えないかと思えますが、そのコメントを言ったということにして、最初に、書いたコメントには書いてないことをお話しします。

最近の文科省のこういった事業はだいたい共通した狙いがあるんですが、それはある課題をやるのは、

当然やるんだけど、それを通して全学的な改革にどう波及するかということを問いかけているものが多い。だからそのグローバル人材育成というものを京都産業大学の場合は、まずは理系三学部・外国語学部を中心にやるという形式でスタートしているけども、全学的なグローバル化にたどりつくんだという事をもっとはっきり示していただきたいと思っております。

今お話しの中なかで、最終的には他の学部にも波及するというお話があったり、あるいは入試(入学グローバル化プロジェクトチーム)のほうでしたっけ。あの入試は全学共通のフォーマットでやっているの、特色づけは難しいという話がありましたけれど、最終的には全学的なフォーマットにグローバル人材育成という要素を入れた学習選抜をするというふうな目標設定がありうるのではと思います。

最後の調査研究に関する説明の中なかでも全学部への波及を目指すというお話になっている。そういった点をもっと強調して明確に示していただきたいというふうに思います。

次に、提出しましたペーパーに則して言いますと、東京大学に勤務して以来、事務職員の能力向上ということに焦点を合わせて、活動をしてきていますので、今回もその事務体制のグローバル化に関して、読みました。それで、その際にさっきの言ったことと、重複するのですが、このグローバル事業に取り組む職員だけではなくて、大学全体の事務職員の語学力を中心としたグローバル的能力の向上、これにどう繋いでいくかということ、ぜひ重点を置いて取り組んでいただければありがたい。

というのは、グローバルの話をしますと、どの大学においてもネックになるのが職員の、事務職員の力が足りないという話です。そのために、中にはそういう専門職的な人を外部から雇って、その人に中心になってやってもらうという大学の事例がありますが、そうした形式では、終身雇用の他の職員が置いてきぼりになってしまっていて、従来のままということになりかねない。やっぱり中心になる専門職的な人と職員全体が、能力向上が呼応して、一緒になって仕事をして、レベルアップしてもらう。そういう工夫をすることによって、弱点が克服できると考える。

本点については、どこの大学でも悩んでることであり、もし京都産業大学で良い取り組みができるならば、それは各大学のモデルとなる可能性があるというふうになりますので、ぜひそういう方向でやっていただければとお願いいたします。

事前にお送りしましたペーパーの2頁に書きましたけれど、実際、グローバルということが語学だけじゃない、むしろ日頃の仕事をやる姿勢とか態度とか、グローバルな関心を持つ視野を広げる努力とか、あるいは毎年毎年業務を改善して、より良くしていくという姿勢、そういうことが基本的な裏打ちになっていくのだらうというふうに思います。そういった要素もこのグローバルの人材育成の事業の中で、あの方向づけをしていただければいいかなというふうに思います。

個々の事業について、主な点を申しますと、語学力の向上については先ほどの説明のように全職員の語学力の実態を把握して、それに応じた取り組みをするというのはとても優れた点でありますし、この能力の把握は、定期的に良くなっていく、この事業を行うとともに職員の力がどういうふうに変化していったか、なぜ変化したか、こういった点を明らかにしていっていただければ、参考になるものが得られるという

ふうに思います。

それから事業報告書の 65 ページにグローバル人材育成プログラムのコンセプトということで、主に研修事業に着目した体系の図があって、そういうふうに体系的に描いてもらおうと書いてもらおうとわかりやすくいいと思うんですが、それが主に研修について書いた図ですので、もっとこの図を広げて、どういう仕事をするにはどういうレベルの語学力が必要なのか、というその行すべき業務とそれからそこで必要とされるスキル、それがわかるようにすると、こういった業務を実行可能になるためには、こういった業務経験をし、こういった研修をすることで、行けばたどり着くことができるということが職員自身に見えるようにする、見える化をするということが今後必要ではないかとふうに思います。

それから細かいところは書いたコメントをみていただいたらいいと思うんですが、最後は第三の職域に関するのですが、第三の職域というものを久しく言われていて、教員でも職員でもない高い専門性を持った者ということは、考えとしてはそう言う人が多いんですが、まだそれに具体的に成功するという例は、あまりない。なかなかそういう人が突然現れるわけではない。どこかにいるわけではない。だから第三の職に相当する人というのは、外にいる人に来てもらって大学の仕事に慣れてもらう面と、中の職員でそういう力のありそうな人をうまく育てて、そういう専門職的な人になってもらうという面と、さらに教員の方々の中でそういう力のある方に一緒にやってもらうと。その教員と職員と外側の人材が合わせて、いわばチーム編成をして取り組んでいくということが必要なんだろうと私は思っています。

さらにその背景にはそういう専門的な有能な人材となる可能性を秘めた職員の層、グループ、人材の厚みがその基礎にあるという姿を作れば、継続性のある状態になっていくというふうに思っています。これ、グローバル担当というだけじゃあなくて、たとえば研究では(ユニバーシティ)リサーチ・アドミニストレーター(URA)と言われている方々もそうですし、そのモデルができれば他の分野、他の大学院に波及するという可能性をというふうに思いました。そんなことを思いました。以上です。

【佐藤コーディネータ】

ありがとうございます。ただいまのご発言内容は、まずは全体的な全学的な組織としてのグローバル化に結び付けていくということを具体化していき、かつ発信していくべきだと。特に職員の職能開発、英語力それ以外の能力についても、具体的に目標を設定して、それがなぜ積み上がっていったのか、実際どうだったかということ踏まえつつ、しかもどのようなことが能力として求められているということも、ある意味可視化しながらそれを共有して取り組んでいく、そういう方向性を大学として出せないかという声を理解させていただきました。ありがとうございます。

ただいまのご発言内容について何かレスポンスもしありましたら、いかがでしょうか。

【大城プロジェクトリーダー】

では私のほうから。

事務職員のグローバル化につきましてはこの申請書のなかにもですね、24年度は、本学の324名の事務職員 専任が200人、その嘱託・契約合わせて120-130人(が、数値目標を達成する)となっております。その中で申請書の中では、TOEICの600点以上が48名で14.8%という形ですけども、25年度の今年度は2名職員数が増加しまして、327名のうち50名と15.3%と。申請書では25年度の目標は16.9%となっておりますので、それについてはまだ、25年度は、達成していないというのが事実であります。大和先生の報告にもありましたが、今年の2月ですね、このグローバルの予算でもって「スーパー英語」という英語の学習のソフトを入れました。それ以外に「English Central(イングリッシュセントラル)」と「ワードエンジン」自学自習システムを導入し、すべての職員に、パスワードを発行してですね。各自使ってもらおうという形の体制をとってもらっています。

この3月までで、何人が利用し、どれぐらいの形でというのは3月末をもってですけども、2か月に当たりますけれども、そこでまずデータを取り、26年度の本格的なものに向けて動いていこうと、思っております。

それともう一つ、最後の第三の職域、IRにはありますけれども、これもちょうど今年の2月の22、23日に、龍谷大学で大学コンソーシアム京都のFDフォーラムがありましてですね、23日に授業アンケートのセッションで愛媛大学の山田剛史先生が報告者ですね、その中でいろいろ意見が出られた中に山田先生ご本人がですね、IRの専門家を紹介してほしいというそういう要望が何点もくるんですけども、山田先生自身ですね、はっきり言いまして、IR専門家はいませんと。ちょうど上杉言われた通りですね、いませんと。本学も、IRで教育支援研究開発担当について公募二回やりました。しかしながら、10名20名公募が来るんですけども、本当に高等教育の修士以上の専門の人はなかなか公募がほとんどない。で2回ともそういう意味では、採用に至らなかったという経緯がありました。やはり本学でもそういう意味では自家生産ではありませんけれども、専任および嘱託なんかでそういう教育していかなければならない。26年度はそういう意味で、IR部門特に教学IRの部門を立ち上げるという形で。動いていこう、というのが今現状のところであります。

【佐藤コーディネータ】

そうしましたら、のちのち他にご発言があれば、ご対応させていただくということで、つづきまして川島様からご発言いただければと。よろしく願いいたします。

【川島委員】

この会議が始まる前に藤岡学長から、忌憚のない厳しい意見をお話いただければと、ご依頼を受けました。

しかし、(お話を)うかがってですね、私は非常に素晴らしいことだと思ったんで、藤岡学長の期待には

応えられない。と、申しますのも、私はこちらの京都産業大学さんとは、結構だいぶ前からそれなりにお付き合いさせていただいております、そのころはですね、キャリア教育が主軸で、京都産業大学といえ
ば1にキャリア、2にキャリア3、4がなくて5にキャリアというふうな状況であったというふうに(思います)。
数年前から、特に藤岡学長が就任されてから、全体的な教学改革に熱心に取り組まれて。それから数年
だと思んですけど、よくぞここまで変われば変わるもんだなあということを、本当にそういう好事例ではな
いかなというふうに思いました。

特に、どうしても評価してしまうのですけれども、先ほどもお話がでていましたように、こういう教育プログ
ラムによってこういう学生を育てますということだけではなくて、大学のみなさんの教学体制を含めたカリ
キュラム構築であったりとか、学部間の様々な連携であったりとか、IRの問題だったりとか、そういう構
造的なところに目をつけられて、教職協働でしかるべき=対応をされている。実際プログラムはまだ始まっ
ていないんですけど。そういう点は評価されてしかるべきなのではないか。

むしろそういうことが抜けていて、「こちらのほうが抜けているんじゃないか」というシナリオだった方が楽
だったんじゃないかなと思うんですが、この外部評価の集まりは。先手を打たれて、ふさがれてしまっ
ているということかなというふうに思いました。ただ、そうは言っても、ちょっとぐらい言わないということで、
一生懸命、あら探したんですけども。

ディプロマ・ポリシー(DP)部分ですね。グローバル・サイエンス・コース(GSC)のDPで例えば、この報告
書の28ページに3つのポリシーがあるんですけど。これはですから、理学部でグローバル・サイエンス・
コース(GSC)を修めた人間が修得すべきものだと、いうことですよ。そういう場合ですね、3つのポリシー
自体がもっている構造的な問題も若干あると思うんですけども、その学位を取得した人間に対する、そ
の学位授与のための方針ですので、それが、ふつうの理学部のDPとグローバル・サイエンス・コース
(GSC)を修めた理学部の人間のDPとが、どういうふうな構造になっているということがわかりやすければ、
もっとよかったなというふうに思いますが。

先ほど申し上げたように、3つのポリシーというものの自体が持っている一種のなんていうか、限界みたい
なものもやっぱりあるので、一概には責められない。ただ、たとえば報告書の30ページのところでグロ
ーバル・サイエンス・コース(GSC)のそれぞれの科目について理学部の場合が一番左の欄で、4つの能
力にそういう意味では対応されていますという仕分けがされていて、こういう仕分けが実際にいいかどうか
って議論が必要ではあると思いますが、他のコンピュータ理工学部と総合生命科学部については、
そういう科目との対応がされていない。することがいいかは、実は私も思っていないんですけど。ここが不
揃いかな、というふうには思いました。

そのことと絡めて、実際の学生の学習によるアウトカム、それをいったいどう方法で測ろうとされてい
るのかなということで、先ほどルーブリックのほうで少し質問しましたけれども、あのルーブリック、ルーブリ
ックを作るのは結構大変だったと思うんですけども、一体どなたがおつくりになったのかなというところ
があるわけですけども、そういうルーブリックなり、あるいはGPAなんかで、それを測定しようと考えられて

いるのか、それともeポートフォリオで、もう少し質的に見ていこうとされているのかというのは、もうちょっと教えていただければありがたいかなあというふうに思いました。

それと、やっぱりこういう特別なプログラムについては、新入生に対するマインドセットが非常に重要になる。いくらいいプログラムであっても、いみじくもおっしゃっているように、「標準的な学生」を相手にしていかれるということですので、入学時において必ずしも高いモチベーションを持っているとは限らない。そういう学生に対して、一体どういうふうな動機づけっていか、リアルショックみたいなものも含めて、与えたいのかというのかということは、今後の課題なのかなと。今、初年次教育ですごく注目されているのはそこですので、そういうところで、他に参考になるような事例みたいなのがあれば、それはご参考にされたらいいのかなと。

いみじくも、報告書 60 頁の教学改革プランの全体像の図については、一番下の所の、想定ですけども新入生が第一クォーターでいきなり留学した、そういうふうにつながる所があるのではないかというふうに思いました。

最後に TOEIC の数値目標なども挙げられていますので、やっぱり学生同士のこと、ピア・インストラクション、ピア・ラーニングの仕掛けなんかを利用すると、語学というのは、成果がわかりやすいので、その辺の使い道としては、あるかもしれませんねということで、他にもいろいろありますけどもきりがありませんので。以上です。

【佐藤コーディネータ】

ありがとうございます。各学部が今回グローバル・サイエンス・コース(GSC)を立てるに当たって、新たに3つのポリシーを策定して、それが従来からあるそれぞれある学部のポリシーとどのような関係があるか。例えば表を同じページに載せるであるとか、そういったところから含めて、特に学生にとって、あるいは教える側の教員にとっても、わかるようになっていく仕掛けが必要だということは、非常にわかりやすいご提言で、ありがとうございました。

そのほかにもいくつかお話をいただけて非常に込み入った、具体的なお話をいただきましたので、参考になることは多かったと思います。はい。では、まず大和先生。

【大和グローバル・サイエンス・コース/イングリッシュ・キャリア専攻整備プロジェクトチーム・プロジェクトリーダー(以下、大和 GSC/ECC-PT リーダー)】

本当に、優しいお言葉ながらも、私たちの弱点というか、アキレス腱にストレートに食い込んでいただきましてありがとうございました。先生ご指摘の点は、弱点というか我々も一番苦労した点であります。これまでこのプログラムが採択される前にもですね、耳野先生、佐藤先生のイニシアティブで、全学的なポリシー3つのポリシー、各学部のポリシーを策定しました。その既存の3つのポリシーとGSC(グローバル・サイエンス・コース)のポリシーとの整合性、これはずいぶん時間を費やして、ワーキング・グループの先

生方を中心に検討しました。そのなかで一番重視したのは、理系は何ととっても専門性。ここにですね、付加価値をつけるために専門性を蔑ろにしては元も子もないと。そういう中で、いかに付加価値を付与するプログラムを創設するか、そこは非常に苦労した点であります。そのなかで単なる「絵にかいた餅」で終わらせないために学則、或いは履修規定の改変。ここにつながる形でプログラムを策定しなければいけない。そういう形で最終的に議論を重ねた結果出てきたものが、今の形です。その中で専門性を担保しながらも、このプログラムで4つの力を身に着けるために総合的に26単位。既存のものを中心にしながらも、これまで学生が避けて通ってきた本当にディマンディングなものを積極的に取らせるような仕掛けを取っておくということです。ですが、ただ学生に最初から難しいものを取れと言っても、難しいわけで。当然私どもの学生は、外語(外国語学部)ももちろんですけど、理系の学生も「自己効力感」の低い学生が多ございますので、そこで初年時にですね、積極的にチャレンジすることの楽しさ、例えば海外の「短期サイエンスキャンプ」コースというのは、本当にやる気があればなんとかなるんだ、ということを経験させる、そういうふうな形になっております。

後は具体的なことに関しましては、理系の3学部で議論を重ねながらもそれぞれの独自性は担保したいということで、3つのポリシーをそれぞれ掲げておりますし、推奨科目のなかで枠取りも少し変えております。具体的には補足を、ワーキンググループのリーダーの中村先生に補足していただければと思いますけれども。

【中村グローバル・サイエンス・コース/イングリッシュ・キャリア専攻整備プロジェクトチーム・ワーキンググループリーダー(以下、中村 GSC/ECC-WG リーダー)】

はい、中村と申します。よろしくお願いいたします。

まずは、このカリキュラムのところ分類のところでは理学部のほうには、各4つの柱に対応しているところが出してあって、他の学部は出していないという部分のご指摘につきまして、これについては、かなり悩ままして、たとえば科目によってはあっちにもこっちにも分類されるよねというのが結構たくさんあるんです。なので、あえてコンピュータ理工学部と総合生命科学部に関しては、そっちのほうを重視したというか、重点的に見たので、もうあえて外しちゃおうと、外してあるんで、若干見にくいということは出ているかと思えます。

具体的に、一個一個拾っていくと、最終的にはルーブリックに収まっていくと。そこで学生さんにも、評価する人にとっても見やすくしようというふうな方向でおります。

そのルーブリックですが、作りましたのは、基本案を、うち(本学)のグローバル(化推進室)のスタッフである長戸さんという方がおられるのですが、その方が自分でそのルーブリックをもとに活動をされた経験のある方なので、その方にたたき台を作ってもらいまして、それからいろんな大学のアメリカのいっぱいルーブリックを集めたサイトがあるんですが、そこから現物を取ってきて、日本語訳するところはして、私と長戸のほうで仕上げたという形になります。

これから4月からですね、実は、実際に入ってきた新入生、および2年生3年生あたりを対象にして、モニターをしてですね、そのルーブリックがちゃんと機動するかっていうのを、そのコースが実際にこの秋学期に始まります。で、秋学期に始まる夏休みの英語から始まるんですが、それまでに検証して、それで実働に移そうということで今、用意に努めているというところになります。

それから、結局モチベーションをどうやってつけるかというところに関しては、夏休みに英語漬けセミナーということをやまして、それでやるぞ！という形でいこうというような形を考えています。それからどうしてもですね、やはり学部 of 学力層、やる気層にですね、全員を突然そっちに引っ張っていくというのは、実情無理がある。というわけで、コースには各学部20名、ちょうど想定しているのは英語エリートというよりも、やる気エリート的なところの方をまず選んで、さらに伸ばして、その方々にまわりの学生々を引っ張ってもらおうという方向なんですね。

やはりその学生達は横の繋がりもありまして、低きに流れる傾向が、どうしてもあります。やる気にしてもそうなんです。なので、できるだけやる気のところを伸ばして一緒にやろうぜって引っ張ってもらおうというような仕組みをさらにこれから構築するのですが、とにかくそういう層を伸ばそうというようなことを考えております。

【佐藤コーディネータ】

はい、よろしいでしょうか。そうしましたら、次のご発言に移りたいと思います。穂屋下様お願いできるでしょうか。

【穂屋下委員】

今日お聞きしましてですね、非常に全学的に取り組んでおられると思います。私もかなりGP関係にいろいろ関わっているのですが、全学的な取り組みに広げていくことの難しさをひしひしと感じています。反対される先生方が必ずいらっやって間違えとやらない方向にいくのと、一番の問題は事務の協力がなかなか得られない(自分たちの仕事と思っていない)ということです。私立大学と国立大学というのは、事務が違うのかなと感じました。そういうのがあってですね、京産大は非常に事務体制がしっかりしていて、非常に羨ましいなど思ってお聞きしておりました。それでですね、私は現場で実際いろいろな教育改革の試みを直接行っていますので、そういう視点から講評できないかと思っいろいろ考えてみました。

事前送付のレジュメには書いていないんですけど、今日の説明にもなかったんですけど、最近「反転授業」というのがかなり注目されております。なんてことないんですけど。普通は、予習してきて授業を受けて、復習します。主な学びとなる知識やスキルの伝達は授業で行われます。反転授業は、それをもうちょっと効率的にやろうということで、授業前の予習が主な学びとなり自学自習で主な知識が獲得され、授業では発展的な課題に取り組むようにして、主体的学びを行わせます。さっきアクティブラーニングという

言葉が出ていましたが、基本的には事前に知識を身に着けさせて、それを基にアクティブラーニングで授業を行うのが一番効率がいい訳ですね。ですからeラーニングで授業前に主に教え、そして授業中教員はファシリテータみたいな形で、協同学習とかで学生同士で学びあえる、また教えあえるようにすればいいという事例が最近報告されています。これが流行ってきたのがここ1年くらいなんですね。ですから、申請書がその前だったから本報告書に記載されていないのかなと思ったんですけど。本事業のラーニングコモンズは基本的に、これに関係していると思われまので、非常にいい取り組みだと思います。実は、後のラーニングコモンズの見学を楽しみにしています。

本学(佐賀大学)では、これまで TOEIC を強制して受けさせるというのはなかったんですね。たまたまですが、今年の新入生から、全学統一英語能力テスト(TOEIC-IP)を1年前期の終わりくらいに受けさせて、それで後期からその点数に応じてクラス分けをはじめました。2年後期の終わりにも受けさせて、必修の英語科目に TOEIC-IP のスコアを30%ほど加味することにしました。というようなことをして強制的に学習させ、少しでも英語の能力を上げる試みを行おうとしております。そういう試みをいろいろやってはいるんですが、はっきり言って、うまくいきません。事前のレジュメの中に、そのことに触れていますので少し説明をいただきたい。

報告書についてですが、内容を十分に理解していないのですけれども、基本的にあまり卒業生の質がどうなるってことはあんまり詳しく書かれていないなあと思ったんですね。我々も報告書を書くときに、何々を実施しましたといっぱい書くしかないのですが、基本的に学生がどうなったかということに関しては、分からない(明確に言えない)ことが多いですね。でもやっぱりこういう取り組みをするのであれば、そこは避けられないと思うんですね。それがうまくいき始めて初めていい例になると思います。今後、もうちょっと頑張っていたきたい。できるだけ数値で出していたきたい。ただ、現時点でそういう成果が表れてないなど見ていたら、平成26年度からが本スタートということで、あまり触れていないんだなというのが分りました。

それからグローバル人材育成事業というのは報告書の中では、どちらかというとトップクラスというか、この特定のプログラムを受けた学生のことに対して書いてあるんですけど、元々京都産業大学の方でおやりになっているいい取り組みが、結構記載されていると思うんですね。この事業の取り組みは、要するに学部全員がこの対象なのかなという受け取り方になるのかなと思ったもんですから。その辺が報告書の中であんまりよくわからなかったですね。というのは、特別プログラムの人は確かに600が目標かもしれないんですけども、英語の TOEIC にして一般の学生も多分450とかそのあたりの得点を持っているんじゃないかと思ったんで、それに対しても、ある程度報告された方がいいのかなという気がしました。

それからですね。このグローバル人材教育というものが、何なのかよくわからない。教員の方もそうなんですけど、学生はもっと分らない。英語の能力が上がればいいというわけでもなく、本来の専門で、専門科目の教育が本当にうまくいっているかどうかというのもやはりその辺が重要だと思いますね。英語で話せたからグローバル人材として活躍できるかというのでそうではない。日本語ができて日本の中で活躍

できない方はいっぱいいる訳ですから。そういう専門教育をどうするか、その辺は4つの中に入っているんだと思うんですけど、具体的でなかったような気がしたんですね。

それからですね、学習時間の確保についてです。1単位が45時間ですけれども。基本的にこの45時間というのが実施できれば、ほとんどの教育問題は解決するんじゃないかと私は思っているんですね。だいたい普通は2単位に対して、授業時間を含めて30時間くらいの学習時間しか確保できていないので、授業内容がほとんど分らない(修得されていない)という当然の結果が出ていると思っています。これを本取り組みの中で、全ての科目をいきなりではなく、特定の科目に関しては努力をするということが必要なのかなと思いますね。どういようにして学生たちに勉強させるということですよ。要するに勉強しないと授業が受けられないような体制とか、手段があるんじゃないかと思うんですけども。そういう努力をされているのかなと。ただ、一般に学生に勉強を強要すると、全部教員職員に跳ね返ってくるんですね。それは結構耐えるのが大変だと思いますけども。でも、いったん勉強する大学の雰囲気を作ってしまうと、逆に教員も職員も楽になると思うんですね。それをどこで切り替えられるのかですね。すいません、報告書の中で、書いてあったかもしれないんですが、ちょっと読めなかったものですからあえて質問してみました。

それからリメディアル教育の件ですが、私は日本リメディアル教育学会の会長をしておりますものから、リメディアルの問題にも興味を持っています。要するに英語ができるだけじゃなくて、基本は基礎科目が重要ですね。例えば、日本語、国語ですね。この国語ができないから、実は自分の考えをまとめることができないので、極端にいうと英語もできない。英語の前に日本語教育が必要って、よく耳にしますね。その辺に対してですね、どういような対策を取られているのかなと思って質問しました。基本的には私立大学の場合は、入学前とか入学後のリメディアル教育なんかがあると思います。その辺教えていただけたらと思います。

それから、学習ポートフォリオを使って、振り返りを行うとか目標を立てるとかいろいろなことができるんですけども、私の大学でも3年前から導入しているんですけど、はっきり言ってほとんど役に立っていない。LMS(ラーニング・マネジメント・システム)は、科目ごとなので利用できますが。学習ポートフォリオが一番役に立つと思うのが、授業が始まって3週間以内に、大学に来ない学生を抽出できる体制ができ、問題児をリストアップすることができるようになるのではないかと。そういうのは、京産大では既に導入されているかも知れないですけど、そういうような仕組みをお作りになるといいのではないのでしょうか。すなわち、入学してきて2か月以内にしっかり教育する習慣を着けさせる。それから、学期ごとに最初の2週間以内に授業に出てこない学生を抽出して、それらの学生に気を付けておくと、かなり留年率とか退学率とかが減るのではないかという気がしています。

習熟度別クラスに関してですが、できる人はよりできるようになるのでいいんですが、できない人はよりできなくなる。初年次教育などでは、協同学習なんか非常に盛んにやられているんですけども、できる学生とできない学生を混ぜてやった方がいいという事例もあるようです。さっきのですね、反転学習も

実はそうなんです。要するに、できない学生がいて、できる学生ができない学生に教えて、みんなが理解したら、みんなを褒めるようにする。そういう仕組みを作ると、その教えるというのがすごく勉強になるので、できる学生もできない学生もそれなりに伸びていくようになりますね。それから先生から教わるのは嫌だけど、友達から教わるのはよいか。そういうものあるんで、この辺が本当に習熟度別にしていいかどうかというの、特に語学教育っていうのは、私は習熟度別クラスにするべきだと思っていたんですけども、本当にそうなのかと最近疑問に思いはじめています。

以上のようなこと、いろいろ考えてみました。

【佐藤コーディネータ】

どうもありがとうございました。穂屋下様と上杉様から、事前に我々からお願いした、非常に丁寧なレスポンスをいただいて、今お手元に印刷物として回っているかとおもいますが、コメント書いていただいたものをご用意しております。いまご発言していただいた内容につきましても、逐一、最終的には文書の形で、最終的な報告書の中に、盛り込む形で回答差し上げたいと思っておりますので、時間の都合上、すべてのコメントにこの場でというわけにはいかないですが、はい。

【大城プロジェクトリーダー】

日本語関係の授業はですね、日本語の作文とかそういう表現関係の力のない者は、日本語表現という1年生の、しかも春学期・秋学期の半期の授業をやっています。これ、若松先生、何コマくらい開講していますか？（若松先生:30 クラスくらいはやっています。）

それ以外、今回グローバルのなかでは、今日見学してもらうラーニングコモンズ2階、3階ですが、3階のカウンターにこの4月からは日本語ライティングスキル専門のスタッフを常駐させます。これは嘱託職員として採用しました。それと同時に英文のライティングスキル、それとICTの専門のスタッフを、合計3名になりますけれども常駐させるというかたちで、ラーニングコモンズの中で、サポートしていきたいと。

それともう一点、能力別のクラス編成する、これは大和先生の外国語学部の英語学科をクラス別でやっていますね。

【大和 GSC/ECC-PT リーダー】

これはやっぱり、スキルによって分けています。スピーキングに関して言いますと、能力別でやったほうが学生の情意面でのプレッシャーが少なくて。ですが、文法的なものに関していうと、ミックスして教えあうと。そういった形で配慮している部分もあります。

【大城プロジェクトリーダー】

で、本学では3000人入学、ほぼ毎年3000人入学します。入学式の後にTOEICブリッジを全員に受

講させて、その点によってクラス編成をやっています。それがどれだけ伸びたかという形で一年後の、今年の場合は、平成 25 年 1 月今度は TOEIC-IP をですね。それでどれくらい伸びたかと。最初はブリッジのほうですから、点数を TOEIC-IP のほうに換算してですね、どのくらい伸びたかという形で。それは何度か報告がありますように 25 年度から全学共通のプログラムに変わりましたから。TOEIC イングリッシュ用になっていますので。最新のこの一年間の成果等は、この 3 月末から 4 月に入ってから、最終的に全学生 3,000 人のですね、各学部別の伸び率という形で出るというふうになっております。

【若松教学グローバル化プロジェクトチーム・リーダー】

学生がちゃんと出てこなくなる学生の注意ですけれども、本学におきましては学生証に IC チップを入れて、教室でタッチをすることで来ていると確認ができるというシステムを数年前にもう入れておりますので、それで来ていない学生を抽出することが可能になっています。ピックアップされた学生については、教学センターのほうから電話をする、学部で対応する等の形で指導をするというシステムを取っております。

【佐藤コーディネータ】

はい、そうしましたら次に、堀江様のほうからお願いします。

【堀江委員】

主に、英語と国際交流についてと申し上げたいと思います。学生の英語力の向上に関しては、大変努力されていると思いますが、やはり理系でも英語力の優れた、さらにまたモチベーションの高い学生、それを重点的に入学させる方法というの、検討すべきではないかというのと、あと、高校からの継続性の重視についてもお考えになっていただきたいと思います。それと、入学前・入学が決まった時点で、授業が始まる前から e-learning も実施されているようですが、それをもっと進められたらのではないかと考えます。今、それこそスマホでインタラクティブにできるような教材が沢山あって、それは、今の学生には、とつきやすいので、そういうものをもっと活用されたらいいのではないかなと思います。

それから、この大学の、例えば外国語学部をみますと、ヨーロッパの言語がかなり多いのですが、正直申しまして、今日、日本での現状として、ヨーロッパの言語にどれだけの需要があるのか、という気がします。そういう意味で、もっと、アジア重視にさらにシフトしながら、英語教育に力を入れることをお考えになった方がよろしいのではないかと思います。アジアでは英語で勉強できるプログラムがいくらでもありますので、今後日本の方向性として、東アジアから東南アジアへのシフトが既に起こっているわけですが、今後もさらに進んでいくという前提にたてば、このことも、ぜひお考えになっていただきたい。シンガポール、マレーシア、フィリピン以外でも、タイやベトナムでも英語のプログラムもいっぱいあります。そういうことも踏まえて、東南アジアにシフトしつつ、英語に力を入れるということが今後の方向性かという気

がします。

それからインターンシップですけれど、これは就職に結びつく経験というのももちろんありますけれども、もっと学生の視野を広げるという意味でも、日本国内あるいは海外、両方でのインターンシップ・プログラムをもっと増やしてもいいという気がいたします。

ただ、上杉さんご発言されていましたが、SD が非常に大切に、現在その日本の国内の大学を見ますと、国公私立、関係なく、国際交流に力を入れなければならないのに、グローバル人材育成に関わる部署の事務部門の方々を見ますと、大学のプロパーの職員は実は少なく、非常勤だったり、派遣だったりというスタッフが多いんですね。それは、ネットワーク構築には向いておりませんし、ノウハウの蓄積も学内でできないという問題がありますので、いろいろ工夫されて、学内で国際交流の第一線で活躍できるスタッフを養成していく必要があると考えます、私も、そういう分野のコンサルを頼まれることもあるのですが、数十の大学のコンサルなどは到底できないので、個々の大学で努力していただきたいと思います。

ラーニングコモンズ(LC)の詳細が、よくわからないですが、これ対象は学生だけです(ね)。LC の中に日本人と外国人の社会人を取り込むようにしていったら、学生は非常に刺激を受けるのではないかという気がするので、それもぜひ検討していただけたらと思います。ポイントだけで申し訳ありませんが。ただ、いろいろ申し上げましたが、この大学のそれぞれの取り組みは、非常に積極的だと思いますし、十分評価に値するものだと考えています。簡単ですけど、以上です。

【佐藤コーディネータ】

はい、どうもありがとうございます。入学時点でのまず英語の扱い方についてのご提言から始まって、多岐にわたって、最後はラーニングコモンズ(LC)の運営についての具体的な話をいただけたと思います。どうもありがとうございました。英語に係るところで、大和先生。

【大和 GSC/ECC-PT リーダー】

いくつかの点だけ、かいつまんで。ヨーロッパ言語とアジア言語の話ですけれども、今回アジア言語学科を新設する際に、新しく韓国語と日本語・コミュニケーションの2つの新しい専攻を設けました。大学の建学の時も東アジアを重視するということもありまして、新しい専攻を立ち上げました。なにせ、昨今の社会、国際情勢でちょっと苦戦している部分もありますけれども、質的にはいい学生が入ってきてくれるのかなというふうに思っております。もう一つ。英語の標準英語の件でありますけれども、私どもは複数形の英語 Englishes をコミュニケーションツールと考えております。具体的に研修先の方ですね、北米、イギリス、ま、ネイティブスピーカーの国だけではなくてですね、実際英語学科の研修先にはベトナムの大学も、派遣先として送り出します。ま、他のところもですね、先生からご指摘、アドバイスいただきましたようにアジア圏での留学先というのも韓国、中国含めて、英語研修の派遣先としております。ほかにお答えがある方

がいらっしゃると思いますので、以上にさせていただきます。

【佐藤コーディネータ】

入学関係、高校との接続といった観点について、何か耳野先生からありますか。

【耳野入学グローバル化プロジェクトチーム・リーダー】

おっしゃる通りで、高校とのつながりをというのはぜひ進めたいと思っております。ありがとうございます。

【佐藤コーディネータ】

時間の方もだいぶ迫ってまいりましたが、最後に松本様からお願いいたします。

【松本委員】

時間過ぎてるんですけど。(佐藤コーディネータ:大丈夫です)本当に熱のこもった取り組みで、心から敬意を表します。ただ、正直申し上げますと、異物感がものすごく残っていて、うまく飲み込めないんです。なんでだろうと、何回も読み返して、わかりました。この報告書の全体的な印象は前のめりなんです。上滑りしてると言ってもいいかもしれない。つまりグローバルという熱に浮かされて、前に突進しているだけ、というのが偽らざる感想です。

その端的な例は、言葉が紋切型なのです。私に課せられたミッションは大学の情報公開・情報発信ということなので、言葉にこだわって読んでみました。その端的な例は「標準的な学生」という言葉でした。

これ最初の4ページの間、5回も出てくる。この「標準的な学生」って何だろうというのが、私にはわからない。つまり、なにを、学力なのか、体力なのか、どんな尺度で測ったのか、まったく定義がないままに、「標準的な学生」を「グローバルな人材」にするといわれてもピンとこない。スタート地点も伸びしろも見えない。私、何度か授業を見せていただいています。それからPBLに取り組んでいる学生さんたちを取材させていただいたこともある。どの方が標準なのか、わからないんです。

初年次教育を見学したときに、20分遅れてこっそり入ってきた学生がいました。それでも、先生と目が合うと「おはようございます」ってこうニコって笑うんですね。あの子だろうか。それともなかなか動かない学生を、「もううんざりするからやめちゃおうか。でもやっぱりやるしかないな」と開き直って仲間と勉強していたあの子だろうか。私にはわからない。その「標準的な学生」がわからないままに、こういういろんなプログラムをやってこられて、はたして本格的に始まった後、どうやって成果を測るんだろうと。これはすごく難しいことになるんじゃないかと。心配しています。

はっきり申し上げますと、文科省から出てきたものに対して、こういう報告書を上げれば、通るでしょうね。これまでの行政を見ている中で、まあこういう感じで通すだろうかと、正直言えば思いました。ただそれで

は多くの人たちの共感を得るのは難しいのではないのでしょうか。同じように学生の育成に悩んでいる、それから自分はこれからどうしたらいいんだろうと進路に悩んでいる若い人たち、自分の子供たちはどうしたらいいんだろうという親たちや自分の生徒たちをどこに預けようかと思っている先生方がこれを読んだときに、説得されるんだろうか、納得するんだろうかと思ったときに、やっぱり疑問符が消えないんです。

目の前にいる学生をきちんと見ずに「標準的な学生」とガバッと括ってしまったときに、すべての言葉が躍ってしまう。例えば、同じこの実施報告書の25ページなんですけど、この中の真ん中②(自らの存在と母国に対する自信と誇りを育成するプログラム)くらいのところに、これこれこういうことで、例年以上に多くの学生が履修し、成果を上げている、という言葉が突然出ている。「成果ってなに?」、わからないです。そもそも成果を測る気があまりなかったのかな、という気もするし、文章が短いこれだけの中に納めなければいけないから書けなかったのかなという解釈もあると思います。

原稿として出てきたら、私がデスクなら、この報告書を通さないだろうっていうのが、非常に厳しい意見ですけども。文科省にはウケるかもしれないですけど、私は記事として出せない。必ずこの根拠を聞きます。

それから例えばですね、分析も足りないな、と。非常に失礼ながら僭越ながら思いました。例えばですね4ページ、この4ページで一番下の表、「(前略)理系3学部のインターンシップの参加率は、他学部と比較するとかなり低い状況が続いている。」という文ですね。なぜなのか分析もないままに、その数行後に「インターンシップ履修率を段階的に50%まで向上させる」と書かれている。現状を分析もせず、どう改善するのでしょうか。そうやっていったん疑いはじめると、いろんな箇所が、「ほんとにかよ?」と思うような文章に段々見えてきます。

今年度から学長室にIRオフィサーが2人雇用されている。そのIRオフィサーはこの事業報告書の前にどんな助言をされたんだろうな。しかも、ただのIRでなくて教学IRというふうについていたので、学生の現状をどういうふう考えているんだろう、それを全学的にこれからどのように共有しようとしているんだろうというのがわからない。インターンシップ参加率が低い。それが経済的事情なのか、ほんとにやる気がないのか、プログラムそのものに魅力がないのか、将来性、自分の将来とどうつながるかわからないからなのか。そうなったときに、それも分析しないままに数値目標掲げたら、これはつなぐのは相当しんどいぞという気がしました。

同じ、先ほど申し上げた25ページに同じことが言えるのは、25ページのやっぱり②だと思うんですが、KSU科目の京都文化、日本文化に関する科目は、今年度に関してはそれほど多くの受講者が見られなかった。これは、このプロジェクトの大事な科目じゃないかなと思うんですが、じゃあ、なぜ少なかったのか。ただ単に残念じゃなくて、大学側の問題なのか、つまりこの授業の時に大事な必修科目がぶつかっていたのか、それともPR不足なのか。学生の問題なのか。あんまり面白そうじゃない、役に立ちそうじゃない。単なる食わず嫌いなのか。なんだろう。なんでですかね。学生ときちんと向き合わないままにプロジェクトだけが進んでいくという、そんな感じを受けました。

ととても情熱があつて、みなさん一所懸命やっつけらっしゃる。ですが、あれ、という感じは否めません。

私たち新聞記者が、とても大事にしている言葉があります。「神は細部に宿る」という言葉なんです。細かいところをおろそかにしていると全体が美しく仕上がらない。これは建築家の言葉だそうですね。私たち新聞記者も細かいディテールを疎かにしていると、原稿の全体の流れがごつごつして、見出しもつかないわけのわからない原稿になってしまう、ということを一年生駆け出しの時から言われています。目の前にいる学生はどういう人なのでしょう。内向きであるとか、理系離れとか、それは国は言うかもしれない。留学に行かないって言うかもしれない。本当に留学に行かないのか、留学に行けないのか。それを分析しないで、大括りにして、「標準的な学生」をこうするって言われても、このプログラムは前のめりになって、本当に育てたい学生にどう届くのか。

おこがましいのですが、大学というのは、学生に変化と成長の機会を提供できる、自由な場だというふうに思っています。無限の可能性を持っている場だと思います。だけれど、文科省のスローガンに躍らされて、とんでもない事業にならなければいいな、と大変僣越ながら申し上げました。失礼いたしました。

【佐藤コーディネータ】

はい。どうもありがとうございました。身の引き締まる思いです。大和先生の第一部の発表での水玉模様(冷や汗を意味していた)が引き立つ。ただきちんと読み込んでいただいて、他の外部評価の先生方もそうなんですが、実際に書かれているものが全てだと、我々も認識していますので、それを土台にこうやって意見交換ができるというふうな立場で我々も考えておりますので、今回が一回目ということではありませんけれども、来年、再来年とこの事業を継続して先生方にも引き続き提言、意見交換をお願いしたいと考えておりますので、どうか今後ともよろしくお願ひしたいと。ここで終わりというわけではないので。

【大城プロジェクトリーダー】

あのですね、申請書の中で一番悩んだのがですね、今松本さん言われた「標準的」という表現でした。

本学の場合は、偏差値から言ってもそんなに高くはありません。これは非常に大雑把な言い方で言われることで、数値に基づいたものではありませんけれども、本学の入学生の9割は不本意入学だと言われることがあります。第一希望が関関同立、関関同立に通らなかったというような学生がほとんど入っているとも言われております。そういう中で、そういう学生をいかに外向けに出していこうかなという形で、苦労した中で、そんなに偏差値の低い学生ってわけではないから、そういう形にも表現できない。一般には関関同立の次には産近甲龍という形で大規模大学、関西の中では8つの大学の中のひとつと言われるんですけれども、そういう学生をどういう形で(表現するのか)というときに、なかなか悩みました。で、最終的に非常にアバウトな形ではありますけれども、「標準的」というのを使わせてもらったんですけれども。

【大和 GSC/ECC-PT リーダー】

補足させていただきますと、本当に「標準的」というのが簡単に言えば学力、従来型の学力に沿った形で、そういう言葉の表現を採用しています。しかし、そこら辺の説明が足りなかったというのは、非常に反省しております。ですが、私たちの基本的な理解としましては、従来型の知識、学力で測る上では、極めて普通、標準的であろうが、彼らが持っているポテンシャルは非常に面白いものを持っていると。いわゆる叩けばいくらでも化ける学生たちが集っている大学であると、そういう認識を持っております。そこら辺の説明が非常に足りなかったというのは、非常に反省しておるところであります。

もう一つ、上滑り、前のめり、といったご指摘、そういうふうを受け止められる文章になっていたということは非常に反省しております。ただ一方ですね、こういう事業をやった時に、文書量が半端ではない。実際のプログラムにエネルギーを傾注するよりも、文書作成に膨大な時間と労力を費やされてしまう、そういったところの弊害も一点あるのかなと思います。

もう一つわたくし共の、松本先生のお考えと定義とちょっと違うかもしれませんが、私たちはね、上滑りはよくない、綺麗ごとよくない。しかし前のめりは、個人的な見解かもしれませんが、全然 OK だと(笑)。もう本当に背伸びしていいんじゃないかというふうに考えております。このプログラムの中で一期生はまだスタートしていませんが、既存の学生との(先行実施プログラムの中での)コミュニケーションは多々ございます。一例がですね、例えば英語セミナー。これ三学部、理系の三学部から集ってですね、英語でコミュニケーションしようと、英語でそれぞれの専門を発表しあう、彼らが自分たちが専門で学んでいることを何とか英語で伝えたい、とそういう意欲をひしひしと感ずることができました。これは外国語学部の教員としましては、彼らのメンタリティ、マインドセットを外国語学部の学生にも移してあげたいな、という思いを非常に強く持ちました。

もう一点だけ、KSU の科目のインターンシップの履修率が非常に低い(この理由が説明されていないというご指摘について)。私の本日の説明でも申し上げたつもりですけれども、とにかく理系は専門。非常にカリキュラムが、密度が濃いわけですね。そこら辺で、専門を取るのに忙しく、インターン等を入れ込む隙が(カリキュラム上)なかった。しかしながら、実際に彼らが(カリキュラムを調整した上で)取らない理由としては、科目がどんな内容なのか、食わず嫌いなどが多分にあったわけですので、そこら辺は情報提供をしっかりとやって、情報提供する過程で興味関心を高めていくこともできたかなと、そんなところがございます。

で、本当に細かい点では本当に、至らぬ点が多数あったと再認識しておりますので、今日の貴重なご意見を活かしながら、どういうふうに・・・(松本委員に気づいて発言終わる)。

【松本委員】

ひとついいですか。その不本意入学の学生が多いというのは、書いてはいけないものなんでしょうか。

私はなんか今の先生のお話を聞いて、こんなふうには伸びたんだと。不本意入学の子が、こういうこのプログラムでここまで来ているって言うほうが、よっぽど説得力があると思います。「標準的な学生」とかいうなんだかよくわからない言葉よりは、よっぽどわかる。いままでの教育というものには背を向けてきたけど、ここに来たら変わったよ、まさにうちの大学は変化と成長の場なんだよ、とアピールできるのに、どうしてこう大学の方ってというのは、なんていうのかな、市場を馬鹿にするんだろう。退学率にしてもそう、要するにマイナス、風評被害というのを必ず考えて言葉をおしゃれに飾るんですね。飾った瞬間、見えなくなるんですよ、本質が。このプログラムの良さも尊さも消えてしまう。どうして不本意入学の学生に火をつけて、世界を背負って立つような、地域を背負って立つ世界を背負って立つような人に育てるんだって、開き直って書かないのか。私にはそこのほうが理解できない。

【佐藤コーディネータ】

どうもありがとうございます。今たぶん、みなさんの目から鱗がおちているところだと思うんですが、言葉を大事にする、と強いメッセージをいただきましたので、この外部評価委員会を経て、じゃあ我々プログラム全体としてどういった報告書を書けるように成長するのかということも、見守っていただきたい。

【松本委員】

そんな大それたこと。成長を見守るなんて、そんなおそろしい(笑)。

【佐藤コーディネータ】

ではあの、若干予定していた時間を超過致しましたし、上杉さんのほうがお時間の都合ということで、退席されましたが、これをもちまして、第二部の対話パートを終了させていただきたいと思います。ここで、森課長にバトンタッチして、お願いします。

【森グローバル化推進室課長】

本日は本当に皆様お疲れさまでございました。ありがとうございました。外部評価委員の先生方から頂きましたコメントに関しましては、先ほどもお伝えしましたが、こちらのほうでもう一度精査させていただきまして先生方に回答させていただきたいと思います。

こちらで整理しまして、また本学のHP上でも発信させて頂きたいと思います。よろしくお願ひいたします。時間も、本当に超過しております。本日はこれで終了させていただきます。本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

(その後、雄飛館ラーニングコモンズのご見学へと移動)

以上